

【実践報告】

コロナ禍をどう生き抜くか

岐阜県下企業の取り組みを取材し壁新聞で発信する

白村 直也¹⁾，村瀬 真未²⁾

¹⁾ 岐阜大学教育推進・学生支援機構

²⁾ 株式会社岐阜新聞社

要旨

令和2年度全学共通教育「ライフコース論（人生設計と生活保障）」は、コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、当初想定していた授業内容に変更を加えた上で実施することとした。他県にならんで岐阜県下の経済活動も甚大な被害を受ける中、人々のライフコース（人生設計や生活保障）はどのような状況に置かれているのだろうか。この授業では学生が実際に聞き取り調査をすることでこの問題にアプローチした。またその過程で得た学びを、壁新聞に活字化し、学内に掲示することで広く他の学生にも共有した。本実践報告はそのプロセスを書き記したものである。

キーワード：壁新聞，企業，コロナ禍，取材，生活保障，戦略

1. 全学共通教育「ライフコース論（人生設計と生活保障）」の概要

授業概要	<p>人それぞれが歩む人生の道筋は異なります。年代はもとより、国や地域、宗教、そして文化圏によっても歩まれるライフコースには様々なものがあります。とりわけ日本では以前のように、学校を出たら安定的な仕事に就くことが難しくなっており、様々なライフコースが模索されている状況にあります。</p> <p>この授業では世界で今どのようなライフコースが育まれており、また「若者」はどう実践しようとしているのかを探ります。その成果を踏まえて日本で模索されるライフコースのあり方を振り返り、ひいては学生が自己の個性を分析し、適性を判断できる機会を通じて自身のライフコース（人生設計）を描く上でのヒントを得ることを目的としています。なお、受講者数にもよりますが、グループでの作業や議論を積極的に取り入れる予定です。</p>
到達すべき目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 世界各国で展開されているライフコースに関わる理解をもとに自身のライフコースを考えるヒントを得ることができる。 2. 今後の自身のライフコースについて、「自分の言葉」で記述することができる。

図1. 「ライフコース論（人生設計と生活保障）」のシラバス抜粋

全学共通教育科目である「ライフコース論（人生設計と生活保障）」（後期）は次のような授業概要と到達すべき目標を明示した上で令和2年10月に開始した。ただ、このシラバスを作成し（図1）、その後いざ令和2年度前期日程が始まって以降コロナウィルスの蔓延が深刻化し、その蔓延は後期日程が始まる時期になっても収まることはなかった。よって、後期日程開始時にシラバスの変更を学生に周知し、対面授業を原則としながらも授業概要と到達すべき目標に修正を加えた。

授業計画については全15回のうち、当初の予定通り前半7回を世界のライフコースにアプローチすることとし、グループ毎で注目する国を選び、その国で経済、社会、そして文化的な背景をもとにどのようなライフコースが育まれているのかを調査した（図2）。またその調査から私たちが何を学び取れるかを検討し、グループ毎で発表をした。後半部についてはコロナ禍の中で人々のライフコースがどのような問題を抱えており、その問題にどのように向き合っているのかを通して生活保障のあり方を考え、いつ終わるとも分からない困難な状況にどのように立ち向かっていけば良いのかを後述する手順を踏んで探ることとした。ちなみに今年度は全学部から計30名の履修登録があった（3年生1名、1年生29名）。

授業 計画	1. 授業ガイダンス
	2. 【世界のライフコース】 世界の経済格差と子どもの貧困
	3. 【世界のライフコース】 義務教育の展開と卒業後の進路
	4. 【世界のライフコース】 世界の婚姻傾向
	5. 【世界のライフコース】 世界の様々な働き方
	6. 【世界のライフコース】 親子関係—介護をめぐる取り組み
	7. 中間振り返り
	8. 【日本のライフコース】 日本のライフコースを考える上での問題点①（子どもの貧困）
	9. 【日本のライフコース】 日本のライフコースを考える上での問題点②（働き方：外部講師）
	10. 【日本のライフコース】 日本のライフコースを考える上での問題点②（子育て）
	11. 【日本のライフコース】 日本のライフコースを考える上での問題点③ （介護の現場と問題：外部講師）
	12. 【自分のライフコース】 自己の個性と適性を考える（他己分析）
	13. 【自分のライフコース】 自己の個性と適性を考える（自己分析）
	14. 【自分のライフコース】 自分のライフコースを描いてみる
	15. 全体のまとめ

図2. 「ライフコース論（人生設計と生活保障）」の授業計画

2. コロナ禍と岐阜県下企業の取り組みに学ぶ

令和2年度は大学の授業も対面とリモート形式の間で大きく揺れた。10月から始まる後期の授業は原則対面形式で実施されたが、授業をする中でソーシャルディスタンスを置き、マスクを着用するなど学生も細心の注意を払っているのが見て取れた。コロナウィルスについてのニュースには常日頃アンテナを張っており、感染が拡大する中で社会はどうなってしまうのか、という危機感を抱いている学生も少なくなかった。こうした状況下において、

人々はどのような問題を抱え、また生き抜こうとしているのか。当初想定していたシラバスでは後半部分を日本で育まれるライフコースを学ぶことを想定していたこともあり、「コロナウィルス」をキーワードに日本の、それも岐阜県下の企業の取り組みを通じてライフコースにアプローチすることとした。グループ毎で注目する企業を選び、下調べをした上で、11月末から12月第2週にかけて電話かメール、可能であれば先方の迷惑とならない範囲でアポイントを取った上で訪問し、インタビューすることとした。その前にまず、どのようにアポイントを取れば良いのかをはじめ、取材方法を学ぶこととした。

取材に出かけよう ― 取材方法を学ぶ

就職を見据え学んだり、本格的な就職活動を始めたりする大学生から「やりたい仕事が見つからない」という悩みを抱える声を耳にする。そうした大学生にとって特筆すべき調査結果がある。日本新聞協会が新聞購読の普及を目的に立ち上げたプロジェクト「新聞科学研究所」が行った全国ネット調査（2019年12月実施）で、「やりたい仕事を見つけられた」と回答した割合は購読者で81.2%、非購読者で62.9%と、購読者は8割を超えた。業界や企業の情報、社会経済の動きに関する知識を広く集められ、興味のある仕事を絞り込めるといった意見が集まった。一方で、「毎日読んでいる人」は2割以下と新聞の購読率は低下傾向にある。その背景にはインターネットやスマートフォンの普及が考えられる。他のメディアの存在感が増す中で、大学生に新聞を有益な情報源として捉えてもらい、新聞そのものに関心を向けてもらおうと、出前講座や取材体験を実施した。

まずは本稿共著者村瀬が岐阜新聞にてNIE（Newspaper in Education：学校で新聞を教材として活用する活動）を担当していることから、新聞の構成や取材の仕方について講義を行った。

岐阜新聞の1面を基に、ニュース性の高さに応じて見出しの大きさや記事のボリューム量が変わることを伝えた。記事は読者に伝えたい重要なことを最初の段落に要点として書いてあることを説明。それ以降の段落は重要度の順番に書く「逆三角形型」と呼ばれるスタイルになっているのが一般的であると解説した。

取材の成否を握るのは下調べであることも強調した。読者に読み応えのある記事を提供するためには、「一を書くために十調べる」姿勢が鍵となることとした上で、取材相手の選定から実際の取材に至るまで、情報を引き出す準備の大切さを伝えた。特に外せない情報として、記事に必要な要素である5W1Hがある。学生たちが取材時のイメージを持ちやすいよう、画用紙などで説明を補足したり、ホワイトボードを活用してポイントをまとめたりして講義を進めた。

取材に同行して

バス会社の代表者、ビジネスホテルの経営者に取材したグループに同行した。

バス会社のコロナ禍戦略に関心を持ったグループは、講義がオンラインに移行し、長期間

バス通学をしなくなった学生自身の行動変化がきっかけとなり、取材先を決めたと話した。自らの日常生活を見つめ、その中から疑問や課題意識を探る経験は、大学の先にある「社会で生きる力」を高める自然な動機付けと考えられる。取材では岐阜乗合自動車（岐阜バス）の代表者から大学生としての意見やアイデアを問われる場面もあった。学部や学科で専攻している学びや研究分野と関連させ、根拠を示しながら発言するだけでなく、その意見が企業側として可能性を感じるか、収益を見込めるものかを聞くなど、発展的で深みのある取材となっていた。

もう一方のビジネスホテル経営者に話を聞いたグループは、岐阜新聞の記事がきっかけで取材先を絞った。感染症対策で宿泊客の安心感を得るだけでなく、受験生やその家族向けの長期滞在プランを設定し、コロナ禍でもニーズが見込める方針に転換したことを新聞報道で知ったことで取材へとつながった。質問を投げる役、撮影する役、取材メモを取る役と、役割分担をして、円滑に取材が進行できる工夫を凝らした。ビジネスホテルは地域経済や地元企業の動向と深く関わっていることを聞いた学生は、コロナ下の地域貢献についても質問。ホテルのロビーに地域の特産品を並べ、販売したり、持ち帰り用のアメニティーや貸出備品として地元企業の商品や製品を採用したりするなど、一時的な収益だけにこだわらない経営の姿勢を聞き、経営者としての要素を学んでいた。

普段、同年代の仲間と大学内で関わることが多い学生らは、言葉遣いや挨拶など、社会人としての基本的なマナーについても、取材体験を通して身に付けていた。

3. 壁新聞の作成 — 学びの共有

令和2年12月14日（月）、21日（月）の授業2回分を新聞作成に時間に充て、いよいよ製作に取り掛かった。グループのリーダーを中心に写真の配置や紙面割を決め、執筆箇所をメンバー毎に分担していった。文字のサイズはなるべく大きめとし、新聞製作に使用する紙には模造紙を使用した（図3、図4）。



図3. 壁新聞製作風景①



図4. 壁新聞製作風景②

年明けの初回は令和3年1月13日（水）であった。この日の授業では冒頭30分で残りの作業を終え、その後新聞の発表会を実施することを以前から予定していた。グループ毎で、聞き取り調査先と調査内容、そして調査を通じて感じたことなどを10分で発表し、その後5分間の質疑応答とした。どのグループの壁新聞も力作で、つい見入ってしまうものばかりだった。聞き取り調査先は柳瀬商店街、バス会社、宿泊施設、サッカークラブ、そして伝統産業など多彩であったが、コロナウィルスの感染拡大に影響を受けていないところはなく、相当な影響を受けていた。学生の発表はその深刻さをうかがわせたが、現状を何とか切り抜けていこうとする企業の力強さも同時に感じさせた。授業終了後には岐阜大学第二学生食堂に持参し、掲示した（令和3年2月10日（水）まで：図5から10）。



図5. 壁新聞①



図6. 壁新聞②



図 7. 壁新聞③



図 8. 壁新聞④



図 9. 壁新聞⑤



図 10. 壁新聞⑥

また、この模様は、令和3年1月25日(月)付けの岐阜新聞「NIE 実践者通通信」に「岐阜大生、戦略聞き 新聞製作」と題する記事として掲載された(本稿末に掲載。図11)。この記事は同日の授業にて学生に紹介することとした。この記事を読む中で、自分たちが取材した各業界それぞれに特有の問題があるものの、学生として提案できるアイデアはないだろうかと話し合った。今回本実践報告を記す中で各グループから活字として寄せられたので、ここで紹介したい。

グループ① 取材先：喫茶店マルイチ (図5. 壁新聞①)

私達はコロナの影響を受けて柳瀬商店街ではどのような思いで経営をされているか、またどのような対策をとられているのかを伺い、その実態を地域に知らせることで地域を盛り上げていくことにつながるのではないかと考え喫茶店マルイチに取材に行った。取材の結果、マルイチでは従業員を2人にまで減らし、1、2か月の間はテイクアウトのみの販売を余儀なくされるなど売り上げが5割減となる打撃を受けたということが明らかになった。(中略)

取材を通して私たちは柳ヶ瀬の集客力の低さが課題なのではないかと考えた。主な原因としては駅から遠い、若者の認知度が低いことなのではないかと予想された。この課題に対して学生ができる打開案について論じていきたい。

駅から遠い、学生の認知度が低いという問題を解決するためにはその長さを感じさせないために駅から商店街までの間に特産物店街を作るのが良いのではないかと考えた。岐阜市には鮎菓子や枝豆まんじゅう、柿ようかん、佐波いちごなどの特産物が存在するため、この魅力を発信し、さらには柳ヶ瀬商店街にも足を運んでもらうという目的である。ここで学生はまずJAぎふや岐阜市農林園芸推進室に特産物店街での販売を提案する。次にクラウドファンディングを利用して資金を集める。最後にSNSで柳ヶ瀬商店街と特産物店街の双方をPRする。さらには柳ヶ瀬商店街の各店舗でスタンプを設置してもらい、スタンプがたまり次第特産物と交換ができるといったスタンプラリーができればと考えている。(以下、省略)

グループ② 取材先：長良川てしごと町家CASA/和傘CASA(和傘)杉山秀二さん(鶺鴒い)、うだつの上がる町並み(美濃和紙) (図6. 壁新聞②)

岐阜の伝統産業である鶺鴒いや和傘、美濃和紙は、岐阜の清流、長良川の恩恵を受けながら大切に受け継がれてきた。長い歴史の中で洗練された技術や価値があり、現代の私たちの力で後世にも受け継いでいかなければならない。現在、和傘や美濃和紙は、製造に携わる人や後継者の不足が深刻な状況になっている。また、和傘や美濃和紙は、価格が高く、市場において不利であるため、地域や法人団体の支援が必須であるのが現状である。鶺鴒いについて、岐阜では世襲制であり、後継者不足ではないものの、遊覧料金の高さによる若年層の鶺鴒いへの関心の低下や、新型コロナウイルスの影響による客数の減少が課題である。

伝統産業においては、歴史をそのまま受け継ぐことも、時代に合わせて変化させていくことも重要であると考えている。まずは、伝統技術を生かした新たな商品の製造で世間の関心を高める。(中略) 学生としては、大学を巻き込んだイベントの企画や開催(伝統産業の体験・講義など)、YouTubeでの360°VR動画の作成やSNSでの情報発信など、若年層の視点や価値観を生かした取り組みができるのではないかと考える。

グループ③ 取材先：高山（図7. 壁新聞③）

私たちは、高山にある「君の名は。」の舞台となった日枝神社を取材した。実際に取材し、現地の人に話を聞き君の名は公開の前後でどのように観光客の変化があったのか。そして新型コロナウイルスの流行の前後でどのように観光客の変化があったのかを詳しく聞くことができた。実際に現地に向かうことで、なぜ高山が観光地として人を集めることができているのかが分かった。

また我々にできることについて考えてみたところ、二点あげられた。一つ目は、やはり SNS の活用であるというところに行きついた。その証拠に私が高山の写真を SNS に投稿したことが、様々な人が高山に行くきっかけになったからである。また、金曜ロードショー等で放映された時などに実際の写真を投稿するのも有効であると考えた。二つ目は、高山へのアクセスが悪いということから、濃飛バスが使えるということを様々な人に提示できればいいなというように考えた。

グループ④ 取材先：岐阜バス（図8. 壁新聞④）

私たちのグループでは、コロナ禍で利用者の減少が考えられる「岐阜バス」について、現状の状況、今後の対策などについてインタビューしてきた。その中で、岐阜バスは、この状況下の今こそ、同業者と、競争していくのではなく、生き残るために、協力していきべきであると考えていた。現在の課題になっているのは、どう連携をしていくかという所である。私たちにできることは、柔軟な考え方を生かし、アイデアを出していくことである。そこで、企業と企業を容易につなげるためのマッチングアプリを作っていくことを提案する。企業同士で問題となっている事柄を共有し、問題解決のための連携をしていくアプリ開発をしていくことができるのではないかと考えた。また、岐阜で問題になっていることについて、周囲の人たちに周知していくことが必要である。そのためには、大学生の SNS などの情報発信能力の特権を使わせてもらい、フォロワー300以上の学生に今の岐阜バスの問題や岐阜のいいところを発信してもらうことができるのではないかと考えた。以上のように、大学生の情報発信能力や考えの柔軟性を生かし、問題解決をしていくことが必要となるのではないかと考えた。

グループ⑤ 取材先：岐阜 大河ドラマ館、十八楼、川原町屋（図9. 壁新聞⑤）

私たちは岐阜市の経済活性化をテーマに、12月初めに金華山周辺にある岐阜 大河ドラマ館、十八楼、川原町屋に取材をさせていただき、コロナ禍で今どのように営業しているか、来客者数の推移をお聞きし、岐阜市に行ってほしいこと、また今後の課題を話してくださった。

どの施設も、5月の緊急事態宣言解除後、感染対策をしつつ営業を行ってはいしたが、来客者は前年より減少し、遠方からの来客者の見込みがつかない状態であった。また、課題点として、岐阜の人は新しいことをあまり取り入れない保守的な人が多いこと、岐阜市の人が岐阜市には何もないという考えを持ってしまっていること、高山下呂地域と岐阜市の南北問題が挙げられた。（中略）

新聞を製作したことで、学生の私たちにできることを知った。岐阜をあまり知らない遠方の人たちへの宣伝、大学生を岐阜に留まらせること、お年寄りの地元住民と若者の関わりの場を積極的につくることや、岐阜の子供達が岐阜を誇りに思える学習、といった内容を考えた。（中略）

これにより、お年寄りの地元住民との共生で若者の商業活動をする基盤をすることや、他県から来た大学生が岐阜に留まって生活してもらうこと、岐阜の子供たちが岐阜の伝統や地域を守るような未来を託すことが期待できると考えた。

グループ⑥ 取材先： グリーンホテル小松家 (図 10. 壁新聞⑥)

私たちのグループは、岐阜県大野町のグリーンホテル小松家が行っているサービスとコロナ対策について調べた。ここでは、受験生向けに集中できる環境をサポートする長期滞在プランを提供している。その際お昼を使った免疫力をあげるお弁当を出している。また、オゾン発生装置や抗菌カーペット、非接触の体温計等を、補助金を利用して購入するなど、コロナの心配を少しでも減らすよう努力している。

現在の最も大きな課題は、グリーンホテル小松家のそういった努力があまり知られていないことである。如何にいいサービスを提案したとしても、それが認知されていなければ利用客はいない。現に、サービスを開始して一年弱がたつ今も利用者はゼロである。これに対し、第一に我々若者ができることは、SNSによるPRである。現代においてSNSは、特に若者の間で大きな情報源の一つとなっている。(以下、省略)

4. おわりに

令和2年度は新型コロナウイルスに左右された一年であった。その影響は本実践報告を執筆している令和3年になっても止まることを知らない。このような状況下でライフコースを学ぶということはどういうことなのかを、ひたすら問われ続けているようにも思われた。

この授業は全学共通科目のキャリア形成科目の一つに位置付けられる。「キャリア形成」というのは様々な視点から語られうるが、社会的及び職業的自立を図る必要な能力を育むことも大きな目的の一つであることを考慮すれば、今回の新型コロナウイルスに翻弄される企業やそこで働く人々のライフコースを学ぶことも、きっと学生のキャリア形成に資するものと考え、当初のシラバスの変更を検討した。

多くの学生にとって壁新聞を作るのは小学校や中学校以来の作業だったようだ。当初はなつかしさ半分で作業を進めていたようにも見えるが、扱う問題の深刻さは、徐々に一人一人の製作への姿勢を変化させていった。新聞製作は情報を発信する責任を伴うため、執筆に多くの時間を割いたが、問題に真摯に向き合い、感じたことなどを自分の将来に活かしていてももらいたいと思う。

【参考資料】

1. 岐阜新聞 令和3年1月25日朝刊 15頁掲載

「NIE実践者通信 コロナ禍の企業を取材 岐阜大生、戦略聞き新聞製作」

【謝辞】

今回学生グループの聞き取り調査(取材)に快く応じて頂きました皆様に心からお礼申し上げます。

コロナ禍の企業を取材

NewsPaper in Education

岐阜大生、戦略聞き 新聞製作

NIE

実践者通信



社会学の講義を選択する岐阜大の学生らが、新型コロナウイルス禍で苦境が続く県内の事業者や経営者に生き残り戦略を取材し、新聞にまとめて学内の食堂に掲示している。新聞製作を通じて「コロナ時代の就職や暮らし方を考えるヒント」を換った。

（村瀬真木）

新聞を製作したのは、社会学の一つ「ライフコースパターン」や変化を個人の生活に「論」を導く1年生約30人。結び付け、豊かな人生を考察す。コロナ禍で従来のやり方や考え



バス会社やホテルなど 社会の変化つかむ

方を直撃する企業が相次ぎ、大学ではオンライン講義が拡大。経路を辿ることで社会のバタリを目的の当たりした学生らは、バス会社、喫茶店、ピシネスホテル、伝統工芸の展示施設に赴き、局面打開のアイデアや現状について聞いた。

宿泊施設を調べたグループは、揖斐郡大野町黒野の「グリーンホテル小松家」を訪ね、小松家が感染症対策として受験生やその家族向けに長期滞在プランを打ち出した、という新聞報道で興味を持った。

伊藤悠真さん(19)「工学部」は、野原佳子代表から道の駅や観光地の売り上げが落ち込んだことを聞き、「地元の宿泊施設として、地域活性化にどう貢献したいか」と質問。地元産の魅を使った弁当の開発や、魅の商品をロビーに並べることで地元企業の知名度アップを図りたい、という思いを引き出した。また、宿泊客に安心な「ホテルこもり生活」を送ってもらった。

別のグループは、講義がオンラインになったため半時間通学しなかつた経験から、バス会社の戦略に興味を持ち、岐阜乗合自動車(岐阜バス)・岐阜市丸重町を取材した。

サッカーの好きな小原佳真さん(20)「応用生物科学部」は、コロナ禍のスポーツ観戦と交通の関係に着目し、「FC岐阜の成績は売り上げに影響するの」と質問。総務部の田野健治部長(49)が「県外からもサポーターが多く集まるほど盛り上がりがある程度見込める。しかし需要喚起の起爆剤としては弱い」と回答。プログラミングを研究する城所祥太さん(19)「工学部」は、自動運転技術に絡めた利用客増加のアイデアを導かれ、学生それぞれが得意分野を切り口に業界の展望を調べた。

指導教官である同大教育推進・学生支援機構の白村直也特任准教授は「学生たちが、変革を求められる事業者や経営者の生り越えるか考える機会になった。社会の変化をつかむ大切さを実感させることができ、新聞への関心も高められた」と手応えを語った。

製作した新聞を食堂に掲示する学生
岐阜市黒口、岐阜大学

社会学の講義を選択する岐阜大の学生らが、新型コロナウイルス禍で苦境が続く県内の事業者や経営者に生き残り戦略を取材し、新聞にまとめて学内の食堂に掲示している。新聞製作を通じて「コロナ時代の就職や暮らし方を考えるヒント」を換った。

（村瀬真木）

新聞を製作したのは、社会学の一つ「ライフコースパターン」や変化を個人の生活に「論」を導く1年生約30人。結び付け、豊かな人生を考察す。コロナ禍で従来のやり方や考え

図 11. 岐阜新聞に掲載された記事

「NIE 実践者通信 コロナ禍の企業を取材 岐阜大生、戦略聞き新聞製作」
(岐阜新聞 令和3年1月25日付15頁掲載)